

短編小説 『公園の恋人達』 whitecaps

###

聡は公園でタバコを吸っていた。周りはどこから湧いてきたのかと思うくらいカップルばかりだ。カップルは皆イチャイチャしている。相手の肩に手を回している男。手をつないでいるカップル。ずっとキスをしているカップルまでいる。聡のほうはそのイチャイチャいちゃぶりを見て嫌気をさしながら、吸い終わったタバコをこのご時世にかろうじて残っていた公園の灰皿立てに押し潰した。

都内の一角のこの公園付近は、それなりに都市計画的に考えて作つてある郊外の地域で、本来あま

り騒々しくなくこの公園のように緑地もたくさんある。しかし最近はいろいろと新しく店が出来たりして、カップルたちが集まる場所が変わってしまっていた。聡、名字もつけて言えば清水聡はこの公園の近くのアパートに住む若い男で、今はミュージシャンをやっている男だ。とはいってもこの前ライブのバックミュージシャンに参加したくらいで、最近は仕事もなく全く「しがない」ミュージシャンになってしまっていた。思えば部屋には年代物のキーボードが埃をかぶって壁に立てかけてあったりするくらいで、聡はもう仕事を諦めかけていた。

今は冬の初めで公園の葉っぱはほとんどが落ちてしまっている。地面にはさつきまで降っていた小雨に濡れて、落ち葉がいたるところに散らばって

いた。太陽の日差しは弱く、聡の首元を冷たい風が通りすぎていく。聡は不意に一つくしやみをした。さつきのカップルはまだキスをしている。それを横目に聡は自分の過去の恋愛を思い出していた。

聡は1年前までつきあっている女性がいた。その女性の名は望月容子。友人から知人として紹介されたのをきっかけにつきあい始め、一時は同棲もしていたほどだった。大学は油絵科専攻の彼女は芸術的センスに秀でていて、聡の音楽性にも理解を示していた。聡は容子の優しいところに惹かれたし、容子のほうも聡を恋人として認めていた。二人は自分たちのそれぞれの夢のビジョンについてよく話し合い、助け合って生きていこうと誓いあつた仲だった。

（最初はうまく行っていた。誰だっけそうだが）  
しかし二人の間には時間が経つほどすれ違いが多くなっていた。いや、聡はそう思っていないかった。容子は違ったのだ。容子は、聡の態度に満足していなかった。

たとえば容子はある日デパートで新しい服を買ってきて、それを着て聡と会ったが聡は気づかなかった。容子は自分のファッションに気を払う方だったが、聡はその容子の気持ちに気にも掛けた。容子が自分が描く絵について聡にアドバイスを求めたときも聡は、

「どつちでもいいと思うよ」

と言って具体的なアドバイスは示さなかった。聡は決して悪気があるわけでもなく、容子のことを何とも思っていないわけではなかったが、何か問

題点があつたとしてもあまり気にしない性格の聡は容子が持つ物事に対する強いこだわりに気づけなかつたのだ。

そしてある日、容子は聡を食事に誘つた。久しぶりの二人での外食だつた。容子の方はこれからの二人の関係について真剣に話そうと、そして何かしらの進展を求めて聡をさそつたつもりだつた。しかし聡は「たまには外食してみよう」という容子の言葉を完全に真に受けていて、その時も容子の気持ちに気づかなかつた。

容子は聡から何か切り出してくれるのを待っていた。

しかし聡は「今日は何を食べようか。容子は何食

べる？」と言ったきりメニューばかり気にして何も重要なことはしゃべらない。そして全てを悟った容子は、それから普通に食事をとり、普通に聡と話し、そして聡の後をついて帰った。帰るとき容子はうつむきながら、街灯に照らし出された落ち葉を失意の面持ちで見つめて歩いていたが、そのことに聡が気づくはずもなかった。

そして容子は部屋を出た。

全ての荷物をまとめ、聡の元を去ったのだ。訳もわからないまま呼び止める聡に向かって、容子はこういった。「あなたはいつだってそう。何を前にしても大きく構えて動じない。でも私は違うの、あなたにとって小さな事でも私には大問題なのよ！」

(馬鹿だった。俺は馬鹿だった)

聡は今でもそう思う。容子の心の内に気づけなかった。容子の求める存在になり得なかった。聡は、大人になりきれなかったのだ。彼女がいなくなり、やがて冬が来た。冷たい、一人ぼっちの冬だった。そして聡は、この空のどこかで容子もそんな寒い思いをしているのだらうと思いを巡らしたりした。

——そして今、彼女が部屋を出てから、二度目の冬が来ていた。

聡はブルツと一震えすると、ポケットから財布を取り出して小銭をあさる。どこかの自販機で温かいコーヒーでも買ってこようと思ったのだ。しか

し財布には電気店のポイントカードが入っているだけで「円も入っていない。

やれやれ、家に帰るか。

そう思つて立ち上がろうとしたとき、聡の元に歩み寄るものがある。聡の視界に入ったその靴に、聡は見覚えがあつた。

「おまえ……なんで……?」

それは、容子だつた。

容子はコーヒーを二本買うと、片方を聡に手渡す。二人は1年ぶりに、肩を並べてベンチに座つた。

「今、どうしてる?」

聡は何を聞けばいいかもわからなくて、ただそう



聞いてみた。

「そこそこ頑張ってる」

容子が答える。

「そうか……」

聡の息が白く流れた。容子は無言のままだ。すると聡はいきなり容子のほうを向き直り、顔の前で手を合わせて容子に頼み込んだ。

「ほんと済まなかった！俺が悪かった。俺のせいで、おまえを傷つけた。俺が不甲斐ないから——」

「もう平気よ。」

「えっ？……」

聡は容子の不意な言葉に勢いをくじかれた。

「これ、あなたについて思っ、持ってきたの。」

容子は箱を差し出す。聡は容子の目を見やると、箱に視線を戻し無言で箱を開いた。

それは、スカイブルーの色をしたマフラーだった。

「あなたのことだから、また夏のまんまの寒そうな格好してるだろうって思って。」

「おまえ……」

「あたしね、個展決まったの。一緒に夢を語った、あなたには伝えておきたいと思って。あなたも頑張つてよ。あなたってすぐあきらめるんだから。ただ、それだけ。それだけ言いたかったの。じゃあね」

容子はベンチから立ち上がると振り切るようにスタスタと歩いていく。聡はコーヒーの缶を握ったまま、後を追うことは出来なかった。イチヨウの葉が一枚、風に舞って聡の視線を横切った。

見渡すと、カップルはもう一組も見えない。公園には若い夫婦が小さな子供の手を持ち遊びに来ている。聡はマフラーを首に巻いた。風はもう、聡の首元には触れられなかった。聡は、ため息のような嗚咽を一つすると、昔感じた小さな優しさを再び感じながら、容子とは逆の方向に自分の家に向けて歩き出した。

■ (2008.9.29)

###

Inspired by 『Lovers Ag  
ain』 EXILE (rhythm zone)